



「歴史ロマン探検隊」険しかった高城山の山頂で

寄稿「西南戦跡を巡って思う」

清松 薫

(会員 佐伯市中山)

今年(明治十年)の西南戦争から一五〇年、佐伯市歴史資料館では「西南戦争と佐伯」と題して特別展示が行われた。これに関連して高橋信武氏(日本考古学会)による講演会「佐伯における西南戦争」も開催された。新政府に不満を抱く西郷隆盛を中心とした士族の反乱は、日本国内最後の内戦でもあったが、佐伯地方が戦闘の舞台となったことはあまり知られていない。

私たち佐伯史談会でも「歴史ロマン探検隊」や「日帰り研修会・熊本・阿蘇」で西南戦争の史跡や激戦地を巡った。

当初の熊本城攻撃に失敗した西郷軍は人吉に後退し、軍を再編して一部三千名を延岡方面に転進させ、豊後方面侵攻の拠点とした。五月十二日の重岡攻撃からはじまり、竹田に侵攻したが、官軍の攻撃に耐えられず小野市まで撤退し三重方面に転身、臼杵城を占領するも官軍の海からの砲撃に抗しきれず、津久見から床木・切畑を経て直見・横川方面まで退却した。

この頃、佐伯城下(佐伯村)に西郷軍が出没し始め、一回目は五月二十五日、三百名が侵入した。しかし官軍の軍艦「浅間」が大入島守後沖から艦砲射撃して退散させた。二回目の五月三十一日も同様、三回目は六月六日、城下の残留士族や豪商たちを養賢寺に集め、西郷軍への参加を要請勧誘し軍資金の提供も求めた。

その時佐伯士族の中から四十名ほどが新奇隊を結成して西郷軍に参加している。

しかし戦争は常に一般住民や非戦闘員にもおよび、台場の構築や武器弾薬の運搬、食糧の運搬や調達に駆り出され苦労したようである。また、直見の大庄屋は新奇隊に軍資金の調達を求められ、村人から集めた金を提供した。戦後はそのことで裁判にかけられ、懲役一年の刑に服した。出所後は、西郷軍のために調達した金が借金となり、山林田畑を売り払い、九代続いた大庄屋家も身代限りになったという。現史談会会長の佐藤巧さんは下直見村大庄屋の六代目佐藤甚兵衛豊光の末孫(分家)である。

また、官軍の本営が置かれていた重岡は、一大軍事基地としてさかえ、一時は六千人もの兵士が駐屯し、酒屋・うどん屋・風呂屋などの商店が立ち並び、炊き出しの労働

に女子供までがかり出され、思わぬ労賃が入ったという。一時の繁栄で一財産作った人もいれば、借金だけがのこったという人もいたようである。

この県南の激戦地で散った官軍の将兵百三十五柱、警視隊十四柱は白坪の岡ノ谷陸軍墓地(招魂所)に眠っている。佐伯史談会では定期的にこの墓地の清掃作業を行っており、また近々現地見学会を佐伯歴史資料館と共催、開催する予定である。

私が西南戦争の激戦地を巡って思う事は、いかなる理由があろうとも決して戦争はするべきではないと。何一つ良いことはないからである。我々は現在の平和な社会に感謝するべきであろう。

※新奇隊・佐伯藩士四十名

明治十年六月十三日直川村横川で編成。

隊長・内藤無一(熊本隊)、半隊長楠熊二郎

延岡、高千穂、五ヶ瀬川の戦いに参加。

戦死十一名、降伏七名、生存帰郷二十二名